西南戦争を考古学的にみる

― 宇目町黒土峠の場合 ―

西南戦争を記録する会
（五十川雄也・江島賢一・遠部　慎・佐藤勇次・高橋信武）

はじめに

大分県南海部郡宇目町の南部に水ケ谷という戸数一〇戸に満たない集落がある。背後の尾根線の向こうは宮崎県である。一昨年の春、西南戦争の戦跡を訪ねて集落の北側にある黒土峠を歩いてみた時、当時の陣地の跡が多数あるのを知った。

西南戦争は一八七七（明治一〇）年二月一五日から九月二四日まで、九州中南部を舞台に明治初期の日本を揺るがした大事件であった。戦跡については、九州各県ともほとんど無関心で今日を迎えている。「雨は降る降るじんばは濡れる　越すに越されぬ田原坂」の民謡で有名な熊本県植木町田原坂は戦争の雌雄を決した激戦地であるが、陣地跡総数三〇〇といわれた陣地跡一帯は蜜柑園に造成されて消滅し、今や田原坂資料館の展示・解説によって当時の状況を推測するしかない。

これに対して人口密集地から遠い場所では、今でも陣地跡が各地に残っている。熊本県菊池郡西合志町二子山石器製作址[1]・同球磨郡山江村山田城跡[2]ではそれらしきものが報告されている。我々が踏査して確認した例には鹿児島市城山、宮崎県延岡市和田越え、大分県直川村陸地（かちじ）峠、三重町三国峠、臼杵市下山古墳前方部、竹田市中川神社裏等がある。宇目町周辺では戦跡の保存状態が良く、その存在は知る人ぞ知るものであるらしい。西南戦争に関しては多数の文献があって、詳細はすでに明らかになっているように考えてきたが、現実の戦場跡についてはほとんど何も記録・報告されていないことに気付いた。

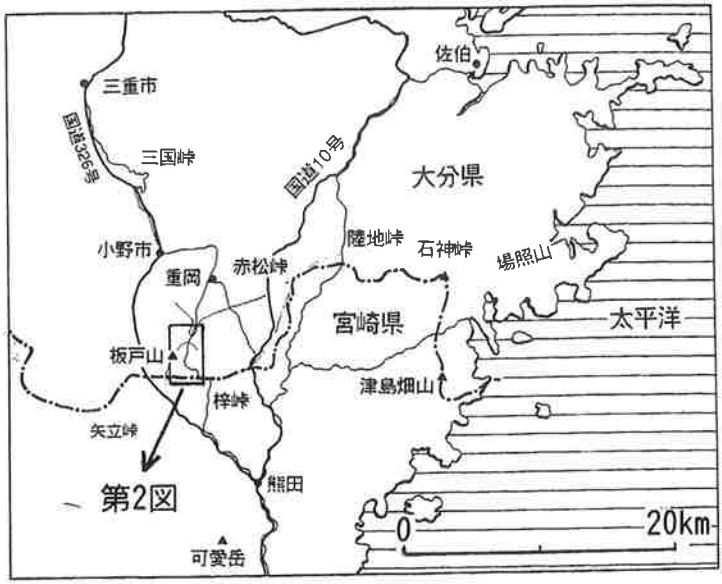
中世山城については考古学的な縄張り調査の解釈により飛躍的に理解が深まっているが、西南戦争をはじめその直前の戊辰戦争の戦跡は考古学的には未開拓の分野である。

遺跡として存在する知られざる戦跡を各種の開発により消滅する前に資料化し、関心ある人々に示したい、戦闘の実態を知りたい等の理由から本会を結成した。まず、現場の記録作成として遺構(以下、台場と呼称する)の分布調査(五、〇〇〇分の一図に地点と形状を記す)と平板測量(二〇〇分の一の地形測量・個々の表面採集遺物の採集地点の記録化)をおこないつつ、文献と対比して現地に残る遺構の解釈を試みてきた。これまでに明らかになったいくつかの点について、黒土峠を中心に紹介してみたい。

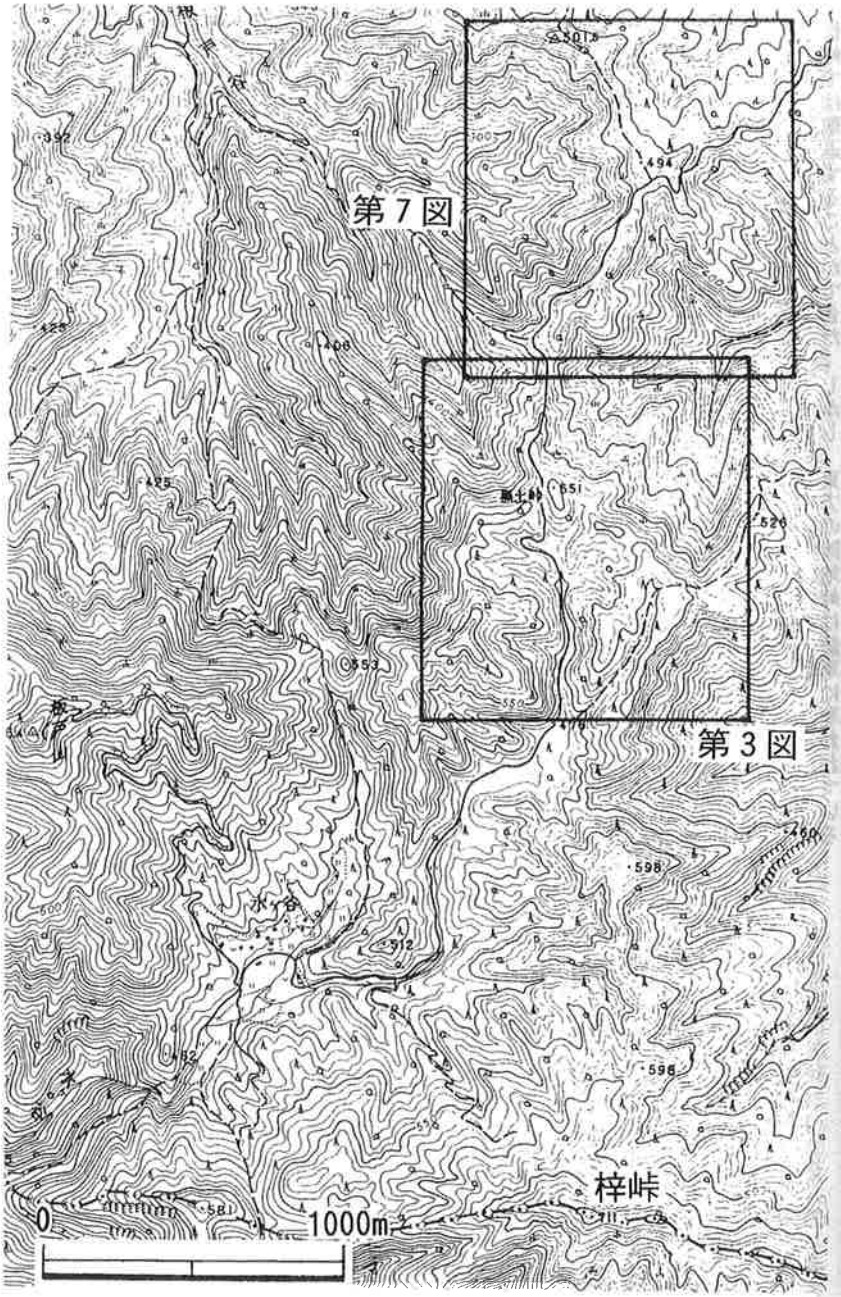
一、黒土峠周辺の地理

三重町と宇目町の境界の三国峠から、小野市・千束・重岡・城の越・黒土峠・水ケ谷・梓峠を通る経路は奈良時代に設定された豊後と日向を結ぶ推定駅路である。これは奇しくも、現在大分市と宮崎市とを結ぶ最短路線としての地位にある国道三二六号と大体同じ場所にある。

なお、黒土峠と城の越とを結ぶ長さ約六〇〇メートルの細長く続く尾根の名称は現在の地図には記載がなく、地元でも地名を伝えていない。熊本鎮台の隈岡長道大尉(13連隊第一大隊)の日誌には「長峯ノ上山」と呼ばれ同第三大隊の「陣中日誌稿」



第1図　大分県・宮崎県境位置関係図(上が北)



第２図　梓峠から城の越まで

では「城ノ越前面ナル乳母山ヲ守ル」と出ている場所があるが、どちらも同じこの尾根であろう。[3]「大分県の地名」[4]には、「応安六年(一三七三)四月四日の今川義範感状案(薩藩旧記雑録)に『宇目・長峰』とみえ、南朝方の菊池氏の背後を突くため豊後に入った義範(貞臣、九州探題今川貞世の嫡子)は、日向の武士土持栄勝が当地に討入り戦ったことを賞している。長峰は標高五〇一メートルの山を中心とする地域で、日向国から水ケ谷を経て長峰を越え、城の越に抜ける往還があった。」とあり、古くから長峰と呼ばれていたらしい(註1)。城の越には曲輪らしい平坦面や堀切りがみられる。縄張りは簡素であり後出の竪堀も見られず、土持氏が戦った頃の山城であろう。一六世紀末に島津氏が九州統一を目指し豊後に侵攻してきたのも、退却して行ったのもこの梓峠越えである。

古代以来使われてきたこの路線も梓峠越えの部分が難路であったため、一八七三(明治六)年に一部変更され宮崎県への正式路線は重岡から南東方に移動して、赤松峠を越え赤松谷を通るようになった。[5]したがって西南戦争当時は、この新路線と旧来の黒土峠から梓峠を越える道の二つが大分と宮崎を結ぶ主要道路であった。また、赤松谷の西側にある尾根筋は当時の記録には赤松古道として出て来るので、赤松峠を越えていく場合、本来は尾根筋を通ったものであろう。

二、戦争の経過

西南戦争の概要については省略したい。熊本で敗退した薩軍は四月末、本営を人吉に移してたてこもり、四方に防御線を敷くと共に、熊本方面で挫折した北上策の代わりに新たに大分方面への突出を試みた。野村忍介率いる奇兵隊は武器や食料・病院等の後方支援の根拠地を延岡に据え、一部の兵力で五月一二日に赤松峠を通って大分県に侵入した。竹田・三重・臼杵や瞬間的には鶴崎をも席巻したが、六月二〇日に一旦宮崎県内に退却した後、再度大分県内への侵入を目指して兵力を増強し県境周辺の直川村陸地峠から赤松峠一帯で攻勢に出た。そのため重岡にあった官軍本営は一時、三国峠への退守を準備したが、赤松峠では撃退することができた。しかし、東方の陸地峠は薩軍に奪われている。

薩軍本営が官軍に押されて宮崎・佐土原・高鍋・延岡と次第に北に移って来た時、大分県境の梓峠にいた奇兵隊は延岡北方の和田越えでの決戦に呼び戻された。梓峠から薩軍が去ったのは八月一五日である。それまでの間、海に面した蒲江町から内陸部の直川村、宇目町にかけての約四〇キロメートルの山岳地帯では、陸軍の熊本鎮台や和歌山の遊撃隊、東日本の士族から採用した警視隊を主体とした官軍約六千人と薩軍約二千五百人とが対峙し、時には田原坂なみの激戦を展開した。峻険な山岳地帯であるため双方とも容易に目的を達することができず、黒土峠と赤松峠はすでに見たように大分と宮崎とを結ぶ当時の主要通路であったため、この周辺では二ヶ月余りの間、両軍の攻防が繰り広げられたのである。

三、戦跡の分布

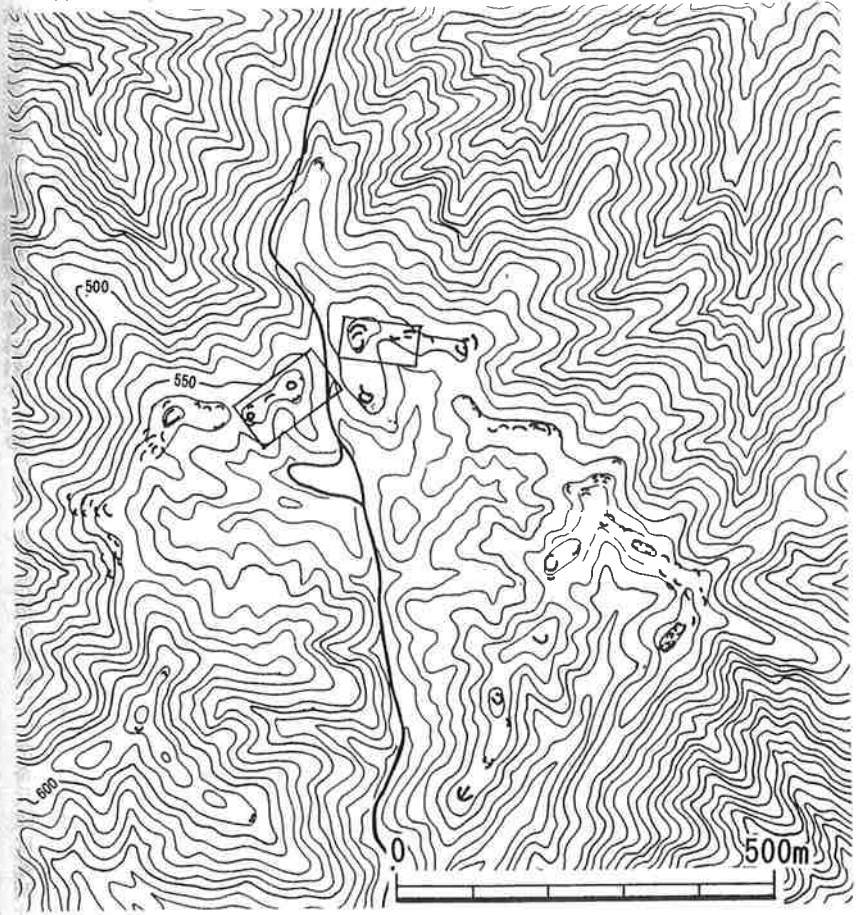
台場の分布調査を実施した範囲は南北五・五キロメートル、東西六キロメートルにわたる地域であり、梓峠・板戸山・黒土峠・長峯・城の越・城の越の西北の尾根・城の越から赤松峠の尾根・赤松古道の尾根等である。ここで合計約二五〇個の台場を確認した。板戸山から黒土峠の中間や城の越から赤松峠までの尾根の一部、赤松峠の東方一帯は未調査である。今回は梓峠・赤松峠周辺については触れず、黒土峠から長峯、城の越を中心に説明しておきたい。

黒土峠付近の戦跡（第3～5図）

水ケ谷集落は盆地状地形の底にあたる標高四四〇メートルほどの場所に位置し、町道水ケ谷線が東北東約二キロメートルの黒土峠（五三五メートル）に向かって徐々に高度を上げていく。明治三四年の五万分の一図にもこの道が示されているが、長峯の部分は明らかに現道よりも東側を通過している。現地には峠から城の越まで現道の東側に旧道と思われる小径が山林に埋没して残っている。城の越では現道よりも上の斜面を走っている。これ以外に通路らしきものは認められないので、林間にある方が古来の道を踏襲し、戦争当時も使われていた本道であろう。黒土峠に立つ石碑によれば、大正五年に道路改修が行われており、この際に若干の路線変更がなされたらしい。

黒土峠では南北に走る本道の西側に三八基、東側に六三基の台場を確認した(第3図)。典型的な台場は、低い方に向かって平面形が突き出た弓形をなす低い土塁状の高まりとその内側の堀込み部とからなる。戦争当時、熊本県や鹿児島県の台場は写真に撮られたり描かれたものがある。それによれば現在土塁状に残るのは、本来は土を詰めた竹かごを並べたり、土嚢の壁をつくり竹や木を編んで表面を覆った状態だったようである。内側は掘り窪められて、兵士が身を隠せるようになっている(第4図)。

峠の西側では本道から離れた位置に標高五六〇メートル前後の尾根状地形が長さ四〇〇メートルにわたり続き、ここに三五基分布する。大部分が外側の敵を意識して構築されて



第3図　黒土峠の台場(四角内は拡大図あり。上が北。)

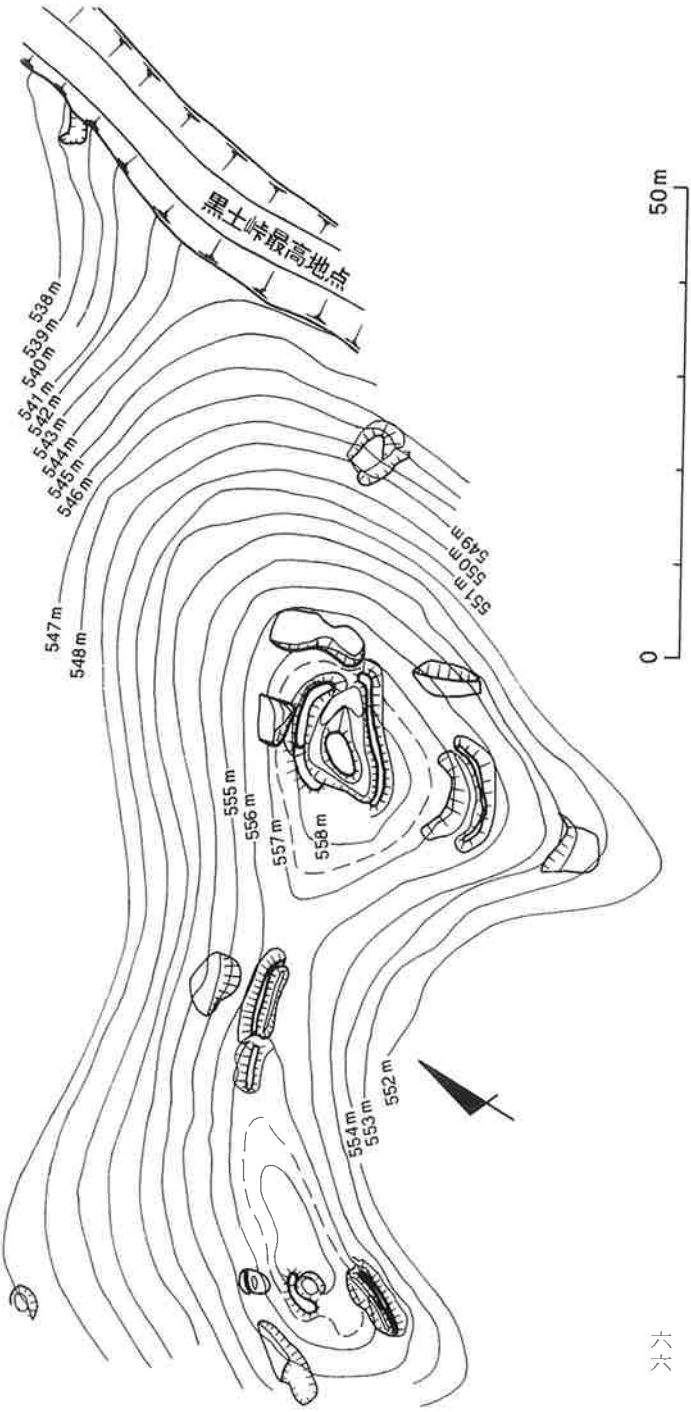
第4図　官軍の台場(「従西日記」より転載)

いるのに対して、四基は道の方を向いている。尾根状地形は南端で標高六三〇メートル程度の山に接し、この山の頂上にも三基台場を確認した。

第5図は峠のすぐ西側にある台場の実測図である。微地形的には細長い独立した尾根であり、長軸の両端がやや高まっている。北東頂上部の中央は楕円形に掘り残した自然地形の周りに窪地が巡り、北西と南東に向かって二カ所に弓形の土塁状高まり(高さ約五〇センチメートル)がある。南側には尾根が続くが、こちら側を警戒した台場が一基ある。北東斜面には峠を越えて来る敵に対する小規模な台場がある。一方の南西頂上部には北西に向いた小さな台場が上下に二基並び、反対に南東側にもやや長い台場がある。この尾根の中間にある台場は、北東側を警戒して設けられたものである。この図の部分で特徴的なのは、土塁状高まりの前面に平場が認められる点である。

峠の東側では北側に突出した場所に一基だけ離れた台場が存在し、峠から南東に直線的に延びた標高五五〇メートルから五七〇メートルの尾根の頂上部に北向きに三三基、南向きに一三基みられる。東部では尾根が分かれて南西方向に二本

走っているが、峠寄りの尾根に散漫に一〇基、東側の尾根に七基ある。標高五六〇メートル前後の陣地跡は低い土塁と内側の堀込み部から構成される。第6図は峠のすぐ東側に位置する尾根の頂上部である。この部分は長さ五〇メートル足らずの規模をもち長軸は南北方向に延びている。東側は一〇メートル程度低い尾根に続いている。ここも頂部の両端に台場がある。北端のものは北を向いたものと、その斜め前方にあって東側の低い尾根を向いたものである。南端には「し」字形の台場が南を向いている。南東斜面に二基の小規模台場があり、本道側を警戒している。東にある一段低い尾根にあるのは、敵側に出口を設



第5図　黒土峠西部の台場

けた途切れた高まりをもつ台場である。

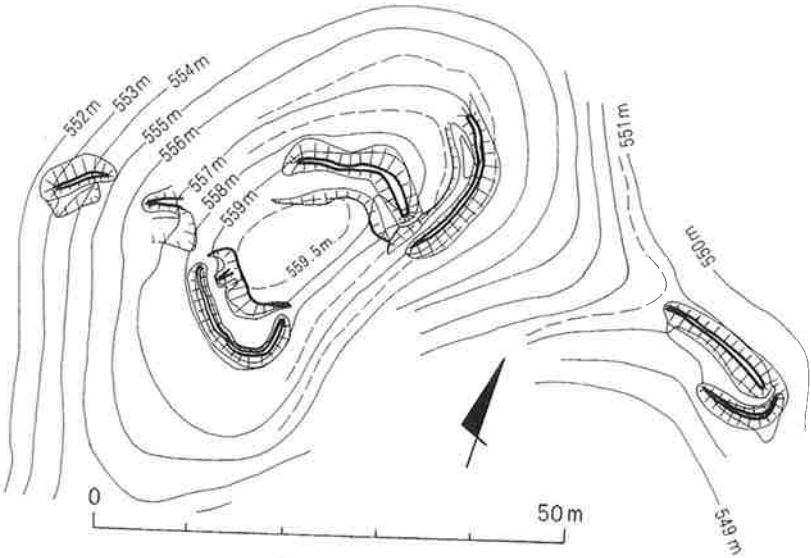
長峯の戦跡（第7図の下部）

長峯は黒土峠の北に続く長さ約六〇〇メートルの細尾根で、三つの山が南北に並んでいる。西側は板戸谷、東側は切り込み谷であり、黒土峠から城の越へ通うには長峯を通るしかない。現道は西側斜面を通っているが、すでに述べたように古道は尾根の上を縫うように通っている（点線）。

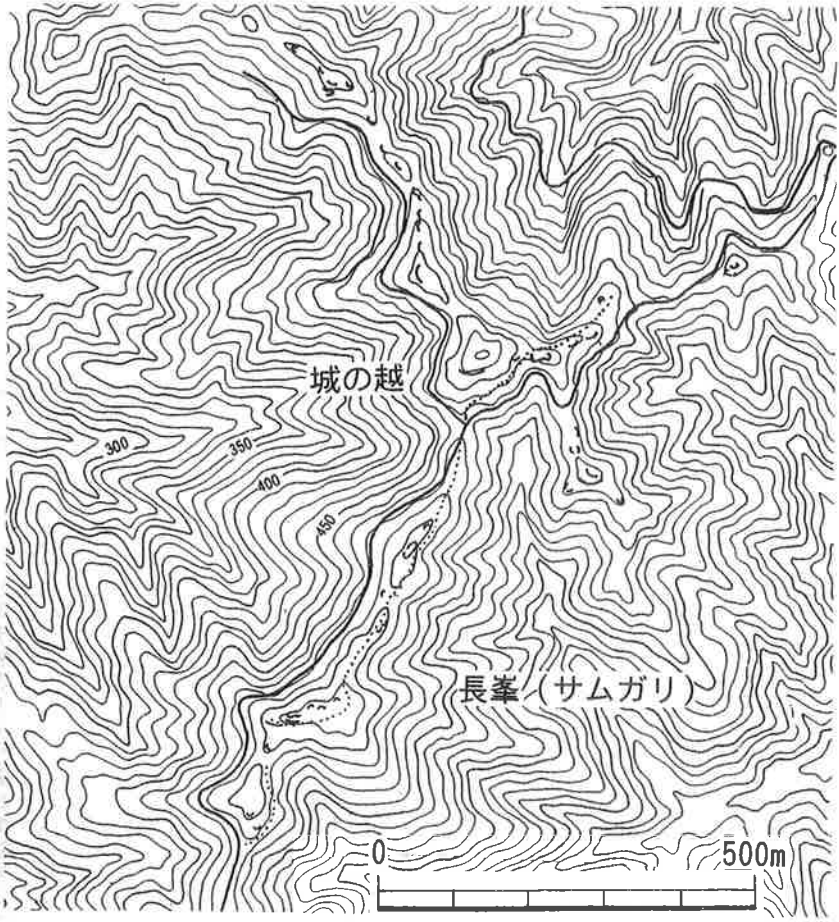
黒土峠に続く尾根の底を見下ろせる南端の頂上端には小さな二つの台場がある。中央の山は標高五一七メートルで東部に平坦面があり、図には示せなかったが溝状の掘り込みが複雑に入り組んでおり、多人数の守備が可能である。台場は山の南部には南を向いて五基、その北東には北西斜面を向いて三基ある。北部は一段下がって細長い尾根となり、北端に東側を向いた二基がある。北側の山は、頂上には一カ所出入り口のある細長い楕円形の台場があり、その他北端に一基、南の山との境に一基がある。

城の越付近の戦跡（第7図の上部）

城の越の頂上は標高五二〇メートル強で長峯より少し高く、黒土峠付近を眺めることができる位置関係にある。頂上は平地で南端には長い土塁状高まりとその内側に窪地からなる台場がある。東側斜面には



第6図　黒土峠東部の台場



第７図　長峯と城の越の官軍台場

中世の崖状の浅い堀切りがあり、更に東側は尾根となって東と北東に延びている。この部分に南向きの台場が五基、古道の西側に北側の谷を警戒して一人しか入れない程度の台場が一基ある。古道が尾根を横切る場所は堀切り跡であろう。南に突出した尾根の台場は図示したもの以外にも、先端部に複数ある。城の越頂上の背後、北西方向には二段の曲輪がある。尾根は麓の蔵小野まで続いているが、途中まで踏査した範囲には南西を向いた台場を確認した。こちらは図示してないが古道があり、堀切りを再利用している。

城の越の台場群の特徴はほとんど南西側、南東側を向いて構築されていることである。

四、黒土峠の戦い

黒土峠周辺を舞台に行われた戦闘については、「隈岡大尉陣中日誌」・「熊本鎮台戦闘日記」やそれをもとに記された陸軍の公式記録「征西戦記稿」[6]、陸軍会計官吏の私的「従西日記」[7]、大分県官吏の報告書類や探偵報告等の掲載された「明治十年騒擾一件」等の政府側記録があり、薩軍側には「西南戦記」[8]・「明治十年役薩軍資料」・「西南の役薩軍口供書」・「西南之役懲役人筆記」[9]等がある。地元側には「西南戦争懐古追録」[10]がある。これをもとに、黒土峠付近で展開された戦闘の経過について確認しておこう。

官軍側の記録

梓峠から水ケ谷、城の越、赤松峠を結んで官軍が守備を始めたのは六月二〇日である。「征西戦記稿」では、六月二四日の戦闘で赤松峠付近の官軍の守備が堅いのを身を以て知った薩軍は、七月三日に西方の梓峠を夜襲し水ケ谷集落から黒土峠までを奪った。官軍は尾根続きの北にある城の越に退いている。同書には「其勢四月廿日健軍ノ賊ニ優ル彼ハ黒土峠ニ拠リ我ハ城ノ越ニ在リ」とある(四月二〇日の戦いは熊本平野東部で両軍が総力を挙げて衝突した一大会戦であった。)。七月四日には薩軍は黒土峠の西北にあたる谷を下り官軍の背後を襲ったが撃退され、また、城の越をも攻撃している。逆に七月二一日未明、官軍は黒土峠の正面および左右の谷から三面攻撃を試み、戦死三六人、負傷八五人(負傷のため後日五人が死亡した。)を出して失敗し、黒土峠での最大の死傷者を記録した。二三日には薩軍が城の越と赤松峠を攻撃した。

七月二七日未明、官軍は黒土峠の南西に位置し一八〇メートルほど標高が高い板戸山を奇襲占領した後、地の利を得た有利な状態で黒土峠を奪還した。薩軍は以後、八月一五日に延岡に撤収するまで梓峠にたてこもることになる。この日のことは官軍側の「従西日記」には「黒土峠ノ数十塁ヲ略潰シ、警備ヲ此ノ地ニ布キ(中略)豊後口第一ノ険塁ヲ抜キ」とある。

官軍の記述は日時・場所等概ね正確であるが、長峯の帰属について記述されていない点、場所の特定という面でやや不正確

である。

薩軍側の記録

戦後刑務所に収容された多数の人々の上申書が「鹿児島県史料」の中に収められている。これは政府側が戦記を書く必要から敵側の記録を求めたものである。大部分は簡単な記述に終始している。奇兵隊の一員として大分県下で戦った人々も多数登場する。

大分方面の戦争全体を記述した薩軍側の記録としては、奇兵隊を率いた野村忍介の上申書「西南戦記」がある。敗れた側であるため記録類も手元にない状態で記されたもので、日時は不正確である。西南戦争全体を薩軍側から叙述した「薩南血涙史」[11]の大分方面に関する記述は、この「西南戦記」とほぼ同文である。野村は梓峠襲撃直後について次のように記す。

官兵復敗レテ走ル者十丁余黒土峠ノ塁ニ防守ス、此塁重岡ニ接近シ実ニ要衝タリ、官兵力ヲ尽シテ拒戦シ曠原渺茫一ノ拠ルヘキナク容易ニ近クヲ得ス

六月三〇日のこととして次のように記すが、正確には七月三日の梓峠占領後の出来事であり、日時は間違っている。

此日午時野村将士ニ言テ曰、黒土峠ヲ攻ムルハ夜襲ニ若クハナシ、今夜十二時ヲ期トシ不意ニ下面ノ塁ニ逼ラハ、頂上ノ敵塁自ラ相撃刺セン、此時急ニ下塁ヲ斫ラハ敵兵上塁ニ退カサルヲ得ス、其勢ニ乗シ進ンテ之ヲ抜カハ、重岡ハ一戦ニシテ得ヘキナリト、衆奮然トシテ曰「蕞尓タル一塁何ソ夜襲ヲ要セン、直ニ接戦シテ之ヲ蹂躙セント、勢ヒ制スヘカラス、是ニ於テ川久保・佐藤即時ニ二中隊ヲ指揮シテ進ム、両翼ノ相距ルヤ凡四丁余、渺々タル平原一塊ノ拠ルヘキナシ、直ニ銃ヲ負ヒ刀ヲ抜キ先ヲ争テ之ニ馳ス、雨注ノ敵丸毫モ憚ル色ナク麾旗空ニ舞ヒ白刃電光ノ如ク下面ノ塁ニ突入ス、官兵忽チ潰ヘ走テ上塁ニ退ク、時ニ一ノ司令官剣ヲ提ケ塁上ニ長立シ呼ッテ曰、退クモノハ斬ラント、大声叱咤軍ヲ指揮シテ返戦シ遂ニ砲丸ニ中リテ斃ル、我軍其壮烈ヲ歎称セサル者ナシ、於是乎我兵利アラス夜ニ乗シテ退ク、」

ここには黒土峠を薩軍が占領したというようには書かれていない。黒土峠の下面の塁、上塁とは具体的には何処のことだろ

うか。下記は野村以外の上申書「西南之役懲役人筆記」に記された黒土峠に関連する記述である。

川上郷之丞上申書：「五月下旬日州陸地峠ヲ守、又敗レテ水ケ谷ヘ固守ス」

有川平之進上申書：「熊田マテ退ク、夫ヨリ梓峠ヘ進撃、勝利ニテ又駿河谷ヘ進軍」

梶原景一上申書：「又翌々日梓サ峠進撃トシテ未明ヨリ戦ヒ、間モナク乗落シ一里ヨリ進撃ス、水ケ谷迄攻入リ直ニ台場ヲ築キ本道ヲ守リ防戦、」

橋口安治上申書：「梓峠ヘ進撃シ是ヲ敗リ水ケ谷ヲ固守ス」

榎田玉喜上申書：「梓峠ニ進撃シ之ヲ敗リ、水ケ谷ヨリ梓峠ヲ守ル」

篠崎正大上申書：「夫ヨリ八戸村ニ行テ一泊シ梓峠ヲ取リ水ケ谷ニ陣スルコト二旬位ニシテ終ニ俣ツコト能ハス、梓峠迄退キ台場ヲ築キ守ル」

この方面に関係する上申書の文面から薩軍側の認識が分かる。彼等の認識では薩軍が守備したのは水ケ谷であり、官軍は黒土峠を守備していたのである。

地元民の記録

重岡の人で西南戦争当時一一歳であった渡辺用馬氏が、一九三三(昭和八)年に自分の記憶と部落の古老の記憶を総合して「西南戦争　懐古追録」をまとめている。七月三日、薩軍が梓峠から官軍を追い払った後の展開について次のように記す。

官軍ハ更ニ退キテ城ノ越ト黒土峠トノ中間ノ「サムガリ」ノ塁ニ踏ミ留リテ死守セリ、(中略、サムガリ)ヨリ黒土ニ赴クニハ、鞍部ヲナセル低地アリテ再ヒ黒土ノ方ニ上ル、官軍ハ此要地ヲ守リ一歩モ退カズ、而シテ敵ハ之ヲ強奪セントスレトモ、低地ノ田尾ニ下リ込ミテ再ヒ登ルノ不利アリ、攻撃意ノ如クナラズ数々決死隊ヲ編ミ、赤裸ニテ刀ヲ輪ニ振リ斬リ込ミ来ルモ、官軍ハ銃ニ着剣シ槍襖ヲ作リ、発砲シテ近ケハ突撃スルヲ以テ、流石ノ薩南ノ健児モ踏ミ込ムノ余地ナカ

リキ、踏ミ込ミシ者ハ尽ク露ト消ユ、敵ハ勢ヒ不可ヲ察シ退テ黒土ノ峠ヲ守レリ

これによると、両軍守備線の境界になったのは黒土峠と長峯(サムガリ)との境をなす垰(たお・田尾)である。水ケ谷の矢野寿三郎氏によると、現在この地点は「たぶのたお」と呼ばれている。

五、遺構と文献記録との比較

以上、官薩両軍と地元側の記録をみてきたが、勝利者側には各種の記録が日々記録され、しかも廃棄されなかった筈である。敗者となった薩軍は八月一五日前後に自ら焼却したため多くの記録は記憶に基づく部分が多く、日時という点では信憑性がおけない。地元の「懐古追録」の内容には官軍や薩軍の記録に見られない地理的な具体性があり、戦跡の解釈にあたり貴重な史料である。また、薩軍が水ケ谷を守ったと主張しているのは、正確には水ケ谷周辺を守備した、黒土峠もその一部に入るということである。彼等の知識には城の越や長峯という地名はなく、「城の越」と「長峯」の位置を黒土峠と呼んでいたのである。

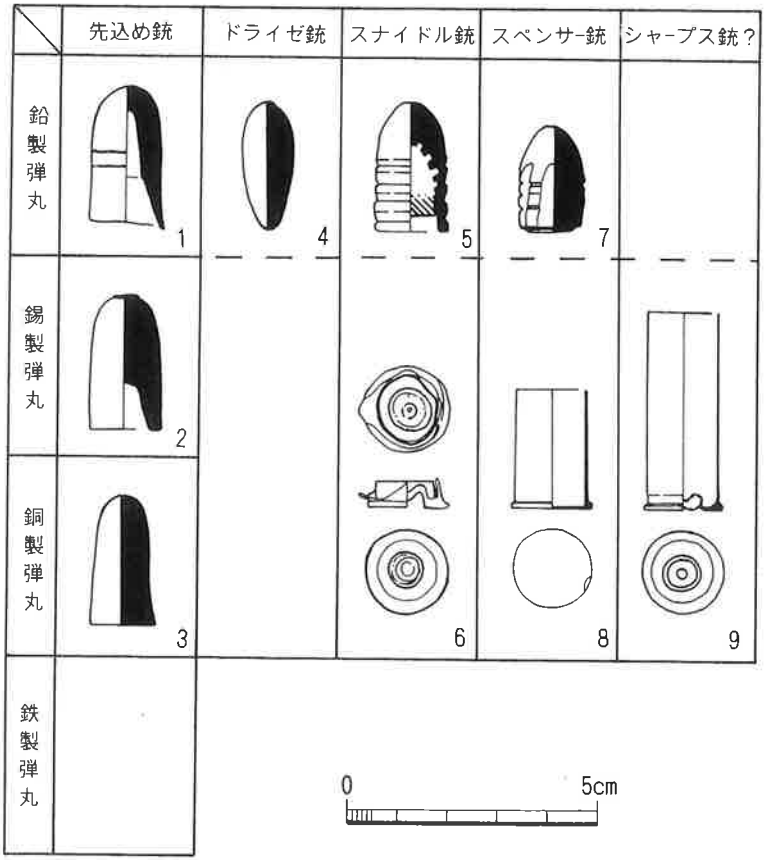
黒土峠・長峯・城の越に存在する台場群の分布状況を各種の文献記録と比較してみたとき、地点ごとの性格が鮮明になってくる。既に明らかであるが黒土峠にある台場群のうち北方の長峯の方を向いて構築されているのは、七月三日に薩軍がやってきてからのものである。長峯と城の越の台場群は黒土峠の薩軍と対峙中の官軍が構築したものである。黒土峠の台場にはかなり南向きのものが混じるが、七月二七日に官軍がここから板戸山までを奪還してからつくられたものである。その時、薩軍は水ケ谷の向こうの梓峠に退いていたので、官軍の守備線はこの辺りまで前進していたのである。

六、遺物について

以上の遺構のほか広い範囲に陶磁器、小銃の弾丸や薬莢、大砲の砲弾が分布している。これらの分布範囲も戦闘経過を示す資料を提供する戦争遺跡としてとらえたい。弾丸・薬莢は複数の種類が認められる(田原坂資料館の古財誠也氏のご教示によ

り、銃の種類と弾丸・薬莢、砲弾について大部分判明した。未だ不詳のものも若干ある。）。

第8図に代表的なものを示す。1から3は先込め式の小銃につかわれたもの。4から9は元込め銃のもの。1はミニエー弾である。側面に浅い溝が3条巡り、内側に深い抉り込みをもつ。ペンチ状の鋳型で鋳成されたものとは違うようであり、官軍のエンピール銃の弾丸であろう。二八・九グラム。2は錫製と思われる。抉りが浅いのは重量を増加させるためであろう。二八・五グラム。3は銅製弾丸。砂型に流し込んで一度に多数を造ったといわれている。二〇・二グラム。2と3は薩軍のものである。4は元込め式のドイツ製のドライゼ銃（別名ツンナール銃）の弾丸である。一九・五グラム。紙袋状の紙薬莢使用。5はイギリス製のスナイドル銃の弾丸。鉛製で基部内側に茶色の陶製の栓が食い込んでいる。火薬が爆発したあと弾丸の末端が広がり、銃身の内面に密着するための工夫である。二八・



第8図　小銃の弾丸と薬莢（S＝2/3）

九グラム。6はその薬莢基部。7はアメリカ製七連発銃のスペンサー銃の弾。二三・三グラム。先端は平たく、8がその薬莢である。この薬莢は下面の縁ならどこでも打撃してよい辺縁式薬莢で、一カ所に打撃痕がある。9はシャスポー銃の薬莢か。同種のものが複数あるが、1点だけスペンサー弾に酷似したものが差し込まれた未使用のものを採集した。ただし、中間部が腐った状態であった。

遺物で興味深いのは、錫製や銅製の弾丸が存在することである。通常なら重さを確保できる鉛製であるべきだが、人吉退守後の薩軍は鉛が欠乏し錫と鉛の合金製をつくり、やがてそれも無くなって軽すぎる銅製の弾丸や最後には飛距離と命中精度に欠ける鉄製品まで作ったと記録されている。今後、採集した銃砲弾の分布状況を分析して具体的な戦闘の状況を復元する予定である。

おわりに

「西南戦記」に出てくる黒土峠の戦闘場面、下面の塁・上塁とはどこだろうか。官軍一士官の奮戦と彼の負傷を薩軍は確認している。「隈岡大尉陣中日誌」には同じ日、多分同じ戦闘を記述している。

午前第三時頃、第三大隊方面梓峠及ヒ水ケ谷ヘ賊大挙襲来シ、頗ル苦戦ノ報ヲ得。我第三中隊ノ内、一小隊ハ応援ノ命ヲ受ケ、森本少尉試補之ヲ引率シ至ル。然ルニ此トキ既ニ賊兵ハ該処ニ突入シテ、我兵城ノ腰方位ニ退却スルニ会ヒ、彼レノ鋭鋒ヲ挫折センガ為、長峯ノ上山ニ彼レノ追撃ヲ防止シ森本少尉ハ単身衆ニ先ダチ奮戦シテ遂ニ重傷ヲ負フ(翌日病院ニ死ス)。

これは、「我兵城ノ腰方位ニ退却スルニ会ヒ(その手前に位置する)長峯ノ上山ニ彼レノ追撃ヲ防止シ」たということであろう。その「長峯ノ上山」とはおそらく長峯にある三つの山のうち最も高い中央の山であり、現実の黒土峠のことでないのは確実である。

戦跡を踏査記録することによって様々なことが明らかになりそうであり、西南戦争を記録する会ももう少し活動を続け、その成果をまとめて報告する予定である。

現地調査に便宜を図っていただいた水ケ谷の元区長矢野寿三郎氏や地元の皆さん、梓峠を案内して下さった軸丸　勇氏と甲斐弘美氏、調査に協力いただいた井　忠国氏・古財誠也氏・岡本茂幸氏に謝意を表したい。

註1　標高五〇一メートルの山は城の越の北西にあり、本来は城の越の南側に比定すべきである。

〈引用文献〉

（1）西合志町資料刊行会一九七一「二子山石器製作址」西合志町文化財調査報告第一集

（2）大田幸博他一九八九「山田城跡」熊本県文化財調査報告第一〇二集　熊本県教育委員会

（3）原口長之・永田日出男・中村哲也校訂一九七七「西南戦争隈岡大尉陣中日誌」熊本史学会

※　原本は隈岡長道著「正本丁丑擾乱熊本城兵陣中日誌隈岡長道自記自筆」

（4）芦刈政治・秦政博・羽柴弘一九九五「南海部郡」『大分県の地名』平凡社

（5）末広利人一九九九「近代地方政治史の実相」

（6）参謀本部陸軍部「征西戦記稿」青潮社一九八七復刻版

（7）川口武定一八七八「従西日記」青潮社一九八八復刻版

（8）鹿児島県一九八八「鹿児島県史料西南戦争」第二巻野村忍介外四名（奇兵隊）連署上申書「西南戦記」

（9）鹿児島県一九八五「鹿児島県史料西南戦争」第一巻

（10）渡辺用馬一九三三「西南戦争懐古追録」高野和人一九九七『西南戦争豊後地方戦記』青潮社　所収

（11）加治木常樹一九一二「薩南血涙史」青潮社一九八八復刻版

〈参考文献〉

所　荘吉一九九六「図解古銃事典」雄山閣出版